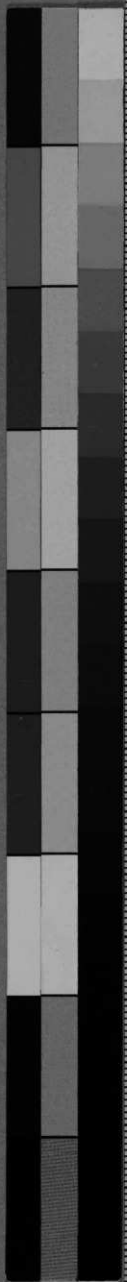


6 7 8 9 260 1 2 3 4 5 6 7 8 9 270 1 2 3 4 5 6 7 8 9 280 1 2 3 4



0.2
マ

宮原遺跡

— 宅地造成工事に伴う発掘調査報告 —

1994

下松市教育委員会

下松市立図書館



150018034

390004-1-0003 (0000) 冊

下松市立図書館

TRC11B039

ごあいさつ

宮原遺跡発掘調査報告書の刊行にあたり、一言御挨拶申し上げます。

時代が激動し、地域社会が大きく変容しつつある現在、古くから築かれてきた文化や歴史の意義が問われています。

特に文化財は、貴重な国民的財産として尊重され、保護されて、後世に伝えねばなりません。郷土の歴史を探り、その知識を広め、伝えることこそ未来の人々への遺産となりうるものであります。

考古学といえば、資料のない遠い過去の学問だと思われがちですが、決してそうではありません。住居やお墓といった大地に刻みこまれた痕跡などは、人間の営み、つまり、その時代の人々の思考や行動の結果生まれたものであり、現在の人間が学ぶべき多くのことを有しています。

この遺跡は、弥生時代の高地性集落の遺跡であり、下松市域の西を南流する末武川の右岸に立地し、末武川の河口から約3.5kmの上流の所にあります。この台地からの展望は、東に末武平野、南に笠戸湾が一望できる見晴らしの良い地が開けます。この地に有力集団が存在していたということが看取されます。

現地にたたずむと、当時の人々の生活の息吹をふつふつと感じます。

今回の、当発掘調査に情熱を持って携わっていただきました関係各位に、心から感謝を申し上げますとともに、今後とも御指導、御支援を賜りますようお願い申し上げます。御挨拶いたします。

平成6年3月

下松市教育委員会 教育長 久行由人

例言

- 1 本書は、上和田団地造成工事に先立って、下松市教育委員会が平成5年度に実施した、下松市大字末武中宇堂の口に所在する、宮原遺跡の発掘調査に係る埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 発掘調査の実施に当っては、山口県埋蔵文化財センターに職員の派遣を依頼し、技術援助を得、地元関係各位から協力・援助を受けた。
- 3 調査組織は次の通りである。

調査主体	下松市教育委員会	(教育長 久行 由人)
事務局	下松市教育委員会社会教育課	(課長 森田 義信)
		(課長補佐 花田 忠義)
		(主査 板村 幸人)
調査員	山口県埋蔵文化財センター	指導主事 土井 勉
	同	同 田中 敏夫

「援助」山口県埋蔵文化財センター職員
- 4 調査期間中は、山口県埋蔵文化財センター主任村岡和雄氏の応援を受けた。
- 5 本書の作成に当り、石材鑑定については山口県立山口博物館専門研究員亀谷敦氏に指導、助言を頂いた。記して謝意を表す。
- 6 本書に掲載した第1図の地形図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1の地図「徳山・光」を複製したものである。
- 7 本書に使用した方位は、すべて国土座標(第3座標系)で示し、標高は海拔標高である。
- 8 図版中の遺物番号は、実測図中の遺物番号と対応する。
- 9 本書で使用した遺構略号は、次の通りである。

SB	: 住居	SK	: 土坑	SP	: 柱穴
----	------	----	------	----	------
- 10 本書で使用した土層の色調の表記は Munsell 方式によった。

(農林省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」)
- 11 本書の作成・執筆は、山口県埋蔵文化財センター所長中村徹也氏の指導・助言を得て、田中(I・III-2)、土井(II・III-1、3・IV)が分担して行い、土井が編集した。

宮原遺跡

— 宅地造成工事に伴う発掘調査報告 —

1994

下松市教育委員会

本文目次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査の経緯と概要	3
III 調査の成果	4
(1) 竪穴住居	4
(2) 土坑	7
(3) 出土遺物	8
IV まとめ	8

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第2図 遺跡周辺の地形	2
第3図 調査区設定図	3
第4図 遺構配置図	折り込み
第5図 竪穴住居実測図	5
第6図 土坑実測図	6
第7図 出土遺物実測図	7

図版目次

図版1 宮原遺跡の遠景 調査区の近景(北から)
図版2 調査区完掘(南から) 調査区完掘(北西から)
図版3 SB01 SK01 SK02 SK03
図版4 SK04 SK05 出土遺物

I 位置と環境

宮原遺跡は、山口県の南東部、瀬戸内海に面した下松市大字末武中宇堂の口にある。そして、下松市の西側を南流する末武川の右岸に立地し、河口から上流へ約3.5km、JR周防花岡駅の西方約1.3km、標高約35mの所に位置する。

宮原遺跡の台上からは、東に末武平野が広がり、南に下松湾、笠戸島、太華山などが、そし



- | | | | | | |
|------------|-----------|-----------|----------|----------|-------------|
| 1 宮原遺跡 | 2 宮原古墳 | 3 市仏遺跡 | 4 末武遺跡 | 5 久米市遺跡 | 6 しらむが森祭祀遺跡 |
| 7 風呂ヶ浴窯跡 | 8 老郷地遺跡 | 9 秋本遺跡 | 10 円光寺遺跡 | 11 日天寺古墳 | 12 上地遺跡 |
| 13 上地丘陵上遺跡 | 14 花岡古墳群 | 15 福寺遺跡 | 16 上広石遺跡 | 17 広石遺跡 | 18 城山遺跡 |
| 19 尾尻遺跡 | 20 御屋敷山遺跡 | 21 御屋敷山古墳 | 22 天王森古墳 | 23 天王森遺跡 | 24 都町遺跡 |
| 25 殿ヶ浴遺跡 | 26 寺迫遺跡 | 27 宮ノ州古墳 | 28 門蔵山古墳 | | |

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 遺跡周辺の地形

て遠くは、国東半島が一望できる絶好のロケーションである。

末武平野を取り囲むようにして連なる丘陵の南向き斜面には、多数の遺跡や古墳が点在し、宮原遺跡もその例外ではない。宮原遺跡は、弥生時代前期から古墳時代にわたる台上の遺跡で、その存在は周知であった。山陽新幹線建設の際は、宮原遺跡・上広石遺跡（1973）として報告されており、弥生時代の環壕集落跡が見ついている。

下松市には、縄文時代の遺跡とは断定できるものはないが、縄文時代の遺物が出土した遺跡は、上地遺跡がある。弥生時代の遺跡は多く、宮原遺跡と標高の同じような位置には、御屋敷山遺跡、天王森遺跡があり、末武平野を挟んで東側には、宮原遺跡と対峙する尾尻遺跡がある。その他、弥生時代の遺跡には、寺迫遺跡、殿ヶ浴遺跡、都町遺跡などがある。



発掘前の調査区

重機による表土除去

古墳では、宮ノ州古墳、御屋敷山古墳、日天寺古墳、天王森古墳、花岡古墳群などがあり、宮原遺跡の台上にも宮原古墳がある。宮ノ州古墳からは、漢式鏡が出土しており、当時この地域に、大きな権力を持った首長がいたことがわかる。

下松市は、気候的に温暖な所で、古代から瀬戸内交易の拠点、山陽道の要衝として栄えてきた。律令時代には、「都怒国」の中心地域であり、生野屋に山陽道の駅屋が置かれた。そして、末武平野には、条里制がしかれた。

やがて、荘園の発展と共に末武保、切山保、鷺頭荘ができたが、南北朝時代には、鷺頭荘は戦乱の舞台となった。古く大内氏から分かれた鷺頭氏が、周防の守護大名として、この地を治めていたが、鷺頭氏は北朝方に属し、内藤氏、末武氏らと共に、南朝方に属し周防の守護大名に命ぜられた大内氏の攻撃にあい、その覇権を失った。その後、この地域は大内氏により治められ、大内氏の加護により、古くからあった妙見信仰の中心地域となった。このことから、当時の下松地域の繁栄が伺える。

近世では、山陽道の花岡市を中心に、御茶屋、勘場として栄えた。

II 調査の経緯と概要

下松市大字末武中宇堂の口における上和田団地造成工事計画に伴い、平成3年11月30日に株式会社大和から造成工事予定地内の文化財について相談を受けた。これを受けて、下松市は、



第3図 調査区設定図（アミ掛け部）

山口県教育委員会に対し、団地造成工事予定地内の分布調査を依頼し、県は平成4年3月4日に現地での分布調査を実施した。踏査及び試掘の結果、竪穴住居状落ち込みと柱穴等の遺構が確認され、弥生土器、土師器片等が遺物として検出された。当該地の頂上部一帯には、弥生時代と推定される集落跡の一部が残存していると判断され、工事に先立ち発掘調査を行って記録保存することとなった。

調査は、山口県埋蔵文化財センターが、下松市教育委員会の依頼を受けて11月16日から開始した。まず地層及び遺構の分布を把握するため、トレンチを設定し人力で掘り下げた。この結果、遺構の残存する丘陵頂部約200㎡に調査面積を絞り込み、ここを重機によって表土除去を行った。その後、人力による精査を行い遺構を検出した。調査の結果、中央部に竪穴住居跡1軒を含む土坑、柱穴等の遺構群を検出した。各遺構の掘り込みを行い、必要に応じて写真撮影を行った。

遺構の全容が明らかになると規模の構造を記録するため、国土座標にしたがった標準座標を設定し、遺構はすべてこれによって記録した。併せて、調査区が西に向かって傾斜しているため、1/50による平板実測を行い、遺構配置図や地形実測図を作成し、調査の進行状況の記録や遺構、遺物のチェックに使用した。

11月29日、完掘写真を撮影し、12月1日現地におけるすべての調査を終了した。

Ⅲ 調査の成果

今回の調査で検出された遺構は、円形竪穴住居跡1軒、土坑5基と柱穴31個である。遺物として弥生土器、須恵器、石器等を検出したが、ほとんどが破片であり量的にも少ない。また、調査対象範囲が小規模なため、集落の規模や性格等を判断することは困難であるが、弥生時代後期から終末期にかけて営まれた高地性集落跡と考えられる。

(1) 竪穴住居 SB01(第5図 図版3)

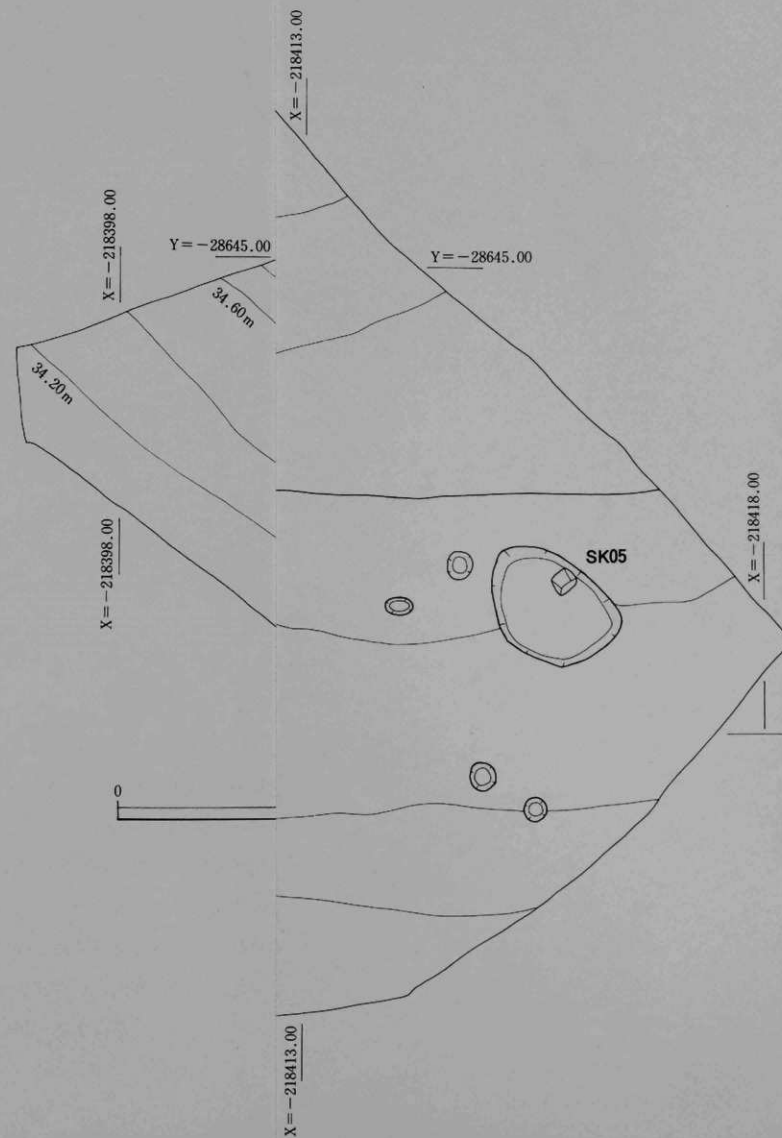
調査区のほぼ中央に位置し、北西側は削平のため明確ではないが、残存部は長径約3.1mを測り、形状は円形竪穴住居跡と思われる。現存する壁高は、最も高い部分で約20cmを測り、東側の壁面直下には幅8cm、深さ5cm内外で断続的に断面U字型の溝がある。南東側には、床面



遺構の検出



遺構の掘り込み



頼し、県は平成4年3月4日
 落ち込みと柱穴等の遺溝が確
 の頂上部一帯には、弥生時代
 立ち発掘調査を行って記録保

頼を受けて11月16日から開始
 し人力で掘り下げた。この結
 こを重機によって表土除去を
 結果、中央部に堅穴住居跡1
 行い、必要に応じて写真撮影

座標にしたがった標準座標を
 西に向かって傾斜しているた
 し、調査の進行状況の記録や

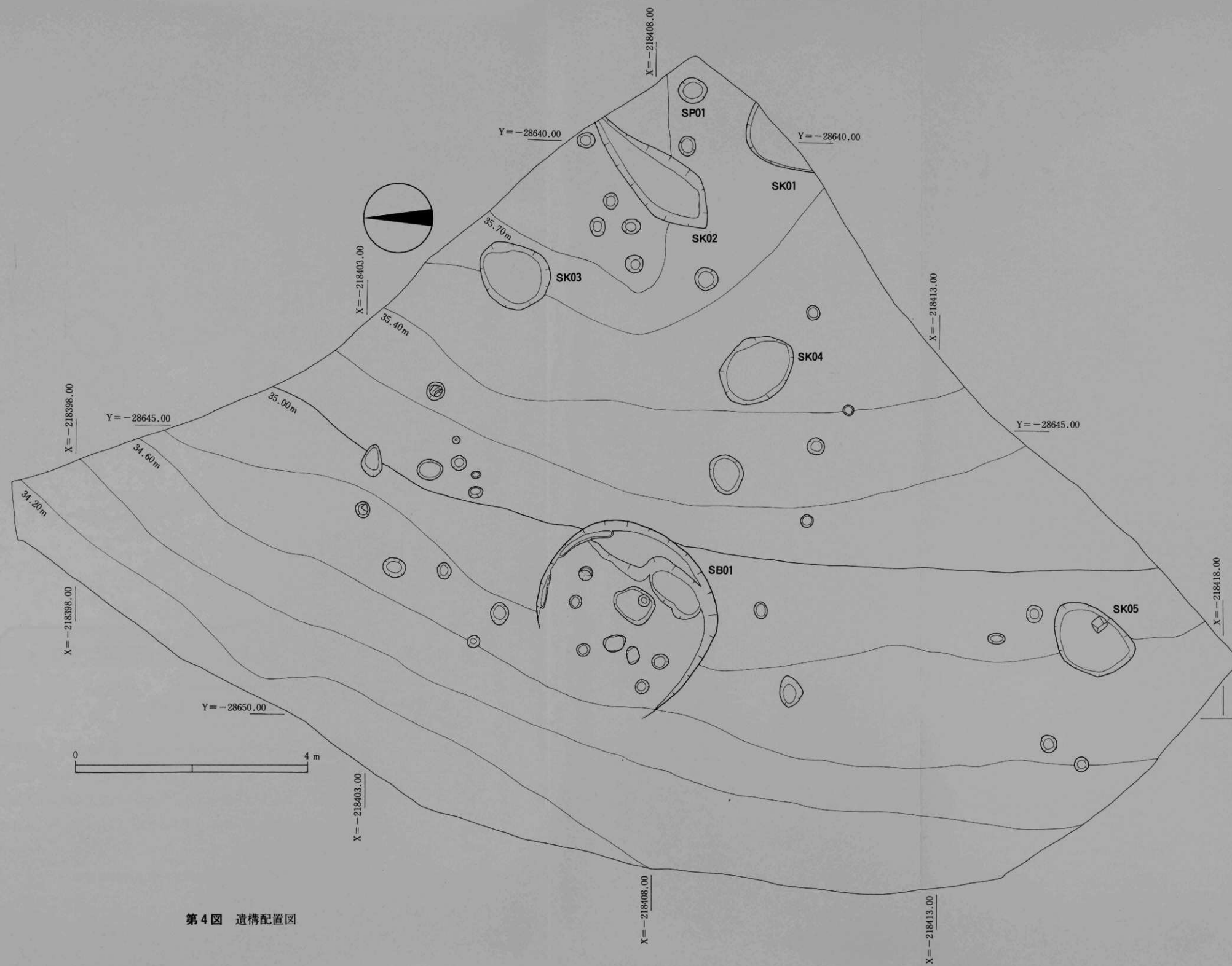
調査を終了した。

基と柱穴31個である。遺物と
 あり量的にも少ない。また、
 とは困難であるが、弥生時代

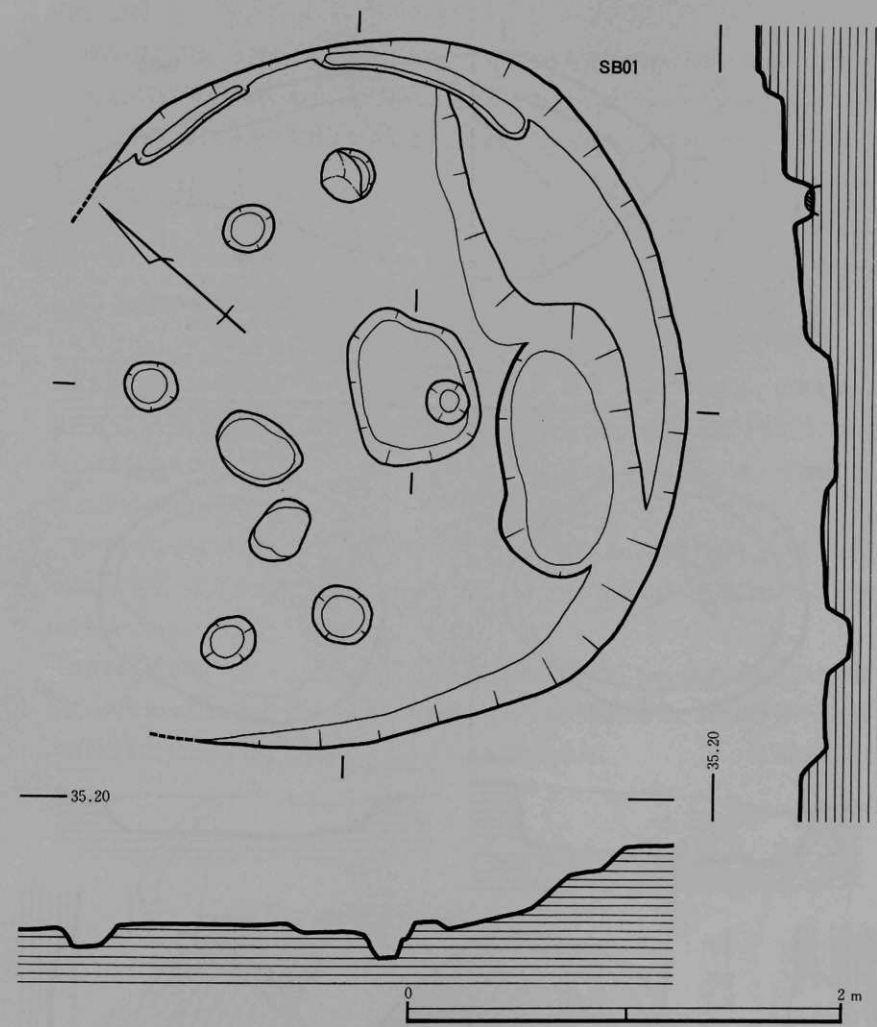
が、残存部は長径約3.1mを
 高い部分で約20cmを測り、東
 溝がある。南東側には、床面



遺溝の掘り込み

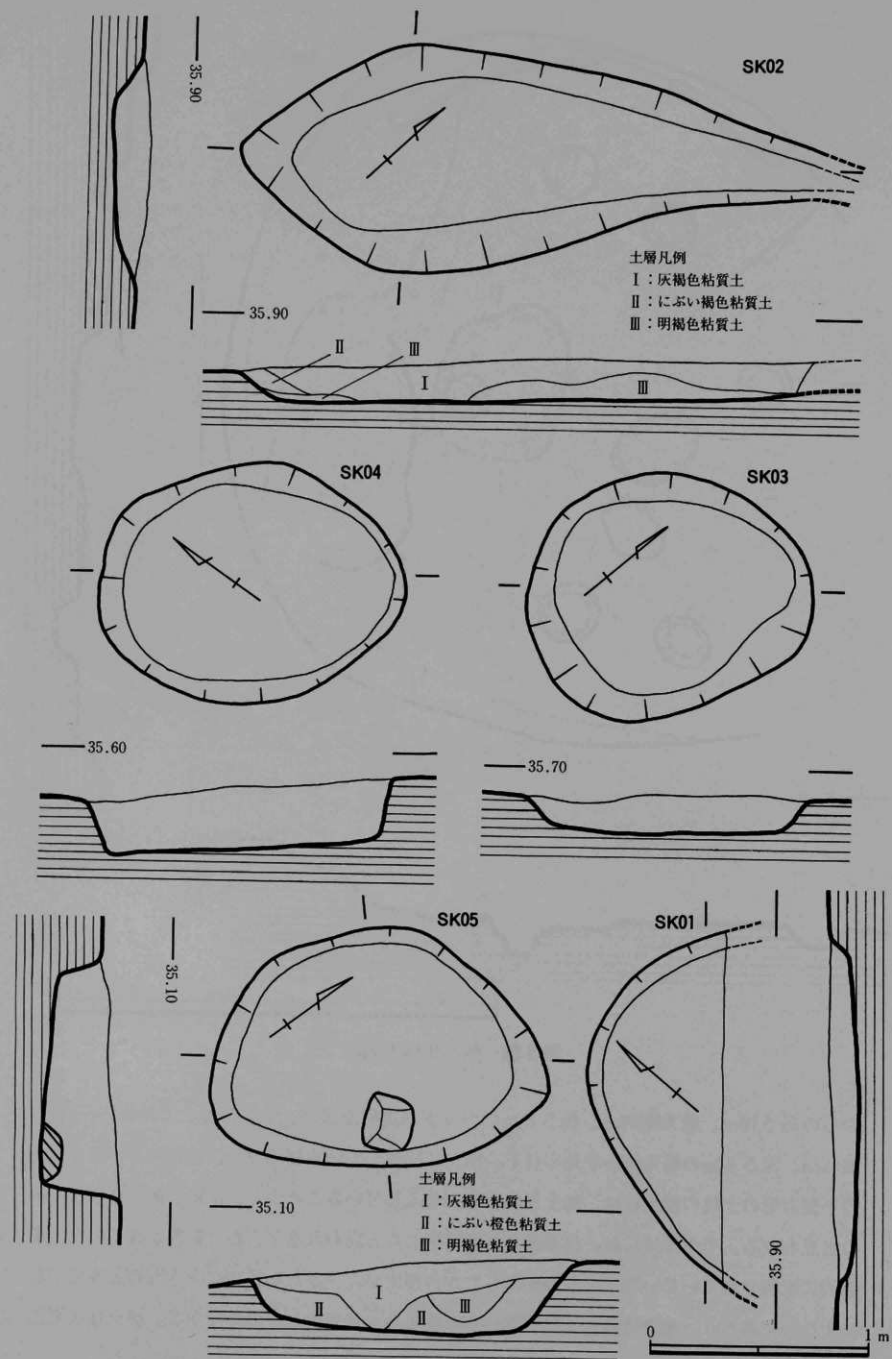


第4図 遺構配置図



第5図 竪穴住居実測図

からの高さ10cm、最大幅54cm、長さ2mのベッド状遺構を設け、それに接して長軸104cm、短軸52cm、深さ4cmの落ち込みが見られる。中央に位置している長軸72cm、短軸60cm、深さ9cmの不整形の土坑の埋土には、焼土と炭化物が混入していることから、炉跡が掘り込まれていたと思われる。そのそばには、作業台として使用したと思われる平石が2個置かれていた。規則的に配列されていない柱穴を5個検出したが、埋土が同一なため住居に伴うものとみて差し支えないであろう。遺物は弥生土器の破片が床面から少量出土したのみである。埋土は灰褐色粘質土の単一層である。



第6図 土坑実測図

(2) 土坑

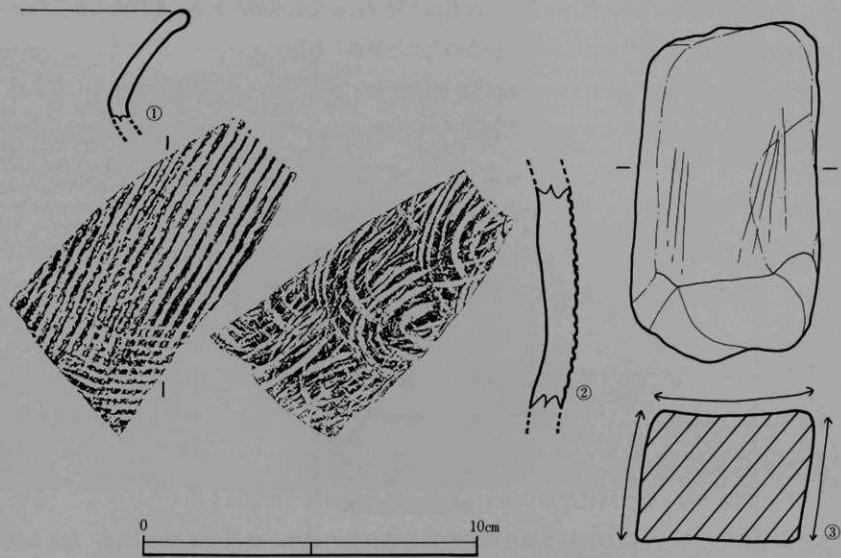
今回の調査では、5基の土坑が検出された。これらのうち遺物の認められたのは、2基である。土坑の残存状態が悪いので、その時代決定は容易ではないが、埋土が基本的に住居跡や柱穴などの遺構と同じ灰褐色粘質土であること、また、土坑内の出土遺物からみて、弥生時代後期のものと思われる。

SK01 (第6図 図版3) 調査区の北東側に位置し、土坑の東側は調査区外のため形状は明かではないが、長軸1.6m、短軸1.2m、深さは最も深い所で10cmの全体的に浅い掘り込みのなされた、皿状の楕円形土坑と推測できる。土坑の底面は、平坦である。埋土は単層で、土質は灰褐色粘質である。遺物は出土していない。

SK02 (第6図 図版3) 調査区の北東側に位置し、長軸2.8m、短軸1m、深さは最も深い所で20cmの全体的に浅い掘り込みのなされた、不整砲弾形の土坑で、底面は平坦である。埋土は3層からなり、土質は灰褐色、にぶい褐色、明褐色のそれぞれ粘質である。遺物は、弥生土器の小片が数点出土した。

SK03 (第6図 図版3) 調査区の北側に位置し、長径1.3m、深さは最も深い所で20cmの円形土坑で、底面はわずかに湾曲している。埋土は単層で、土質は灰褐色粘質である。遺物は出土していない。

SK04 (第6図 図版4) 調査区の中央東側に位置し、長軸1.4m、短軸1.1m、深さは最も深い所で30cmの楕円形土坑で、底面は北西側に傾斜した平坦面である。埋土は単層で、土質は灰褐色粘質である。遺物は、弥生土器の小片が数点出土した。



第7図 出土遺物実測図

S K05 (第6図 図版4) 調査区の南側に位置し、長軸1.6m、短軸1m、深さは最も深い所で30cmの楕円形土坑で、底面は平坦である。埋土は3層からなり、土質は灰褐色、にぶい橙色、明褐色のそれぞれ粘質である。土坑の底面には、用途不明の長径30cmの石が遺存していた。遺物は出土していない。

(3) 遺物 (第7図 図版4)

①は甕形土器の口縁部片である。軟質で調整痕等は摩滅しているが、わずかに外面に指押さへの痕跡が残る。弥生時代後期のものと比定される。②は須恵器片でタタキ成形が見られる。③は石英斑岩製の砥石で、3面を使用する。④は甕形土器の胴下半部で、調整は器面剥落につき不明である。粗砂粒を少し含む。形状からして弥生時代後期後半と比定される。⑤は甕形土器の胴下半部で内面にケズリが見られる。細砂粒を含む。焼成は良好である。弥生時代後期後半と比定される。⑥はS P01より出土した。沈線の施文がみられる。弥生時代前期のものと比定される。

IV まとめ

宮原遺跡は以前に山陽新幹線建設のため、昭和47年1月から11か月にわたって発掘調査が行われ、今回の調査対象地と同じ延長上の丘陵上に、弥生時代の前期後半と後期末、古墳時代の複合遺跡が存在することがすでに明らかになっている。

今回の調査区は、同丘陵を2分する国道2号線を挟んで南の丘陵残存部に位置している。島田川流域には、低地の水田地帯を見下ろす丘陵の頂上や斜面には、石光、岡山、清水、畠岡等に代表される弥生時代のいわゆる高地性集落と呼ばれる丘上遺跡がある。本調査区もこれらと同様な立地条件を満たすことから、狭義の高地性集落と考えてよい。

今回、住居跡の検出は1軒のみであった。出土遺物が少なかったが、床面から出土した土器片の特徴から弥生時代後期後半と思われる。以前に調査された宮原遺跡の南端部にあたるのがわかる。

5基の土坑のうち遺物が出土したのは、S K02とS K04である。いずれの土坑も弥生時代後期のものと思われるが、それ以上詳細な時代判定はむづかしい。検出された柱穴の総数は31個。柱穴の埋土は住居跡などの遺構にみられた灰褐色粘質土と同じであるため同時期のものと考えられる。

遺構からの伴出遺物ではないが、同遺跡包含層から須恵器(第7図 図版4)が出土している。同丘陵上の遺跡近くに、古墳時代後期の宮原古墳と呼ぶ横穴式石室墳があることから、これらに関連するものとみている。

今回の調査では、弥生時代後期に属する宮原遺跡の集落跡の南限域を明らかにすることができた。末武川の平地を臨む良好な弥生時代の高地性集落の規模が確認できたことは、大きな成果といえよう。

図版1



宮原遺跡の遠景



調査地の近景(北から)

図版 2



調査区完掘 (南から)



調査区完掘 (北西から)

図版 3



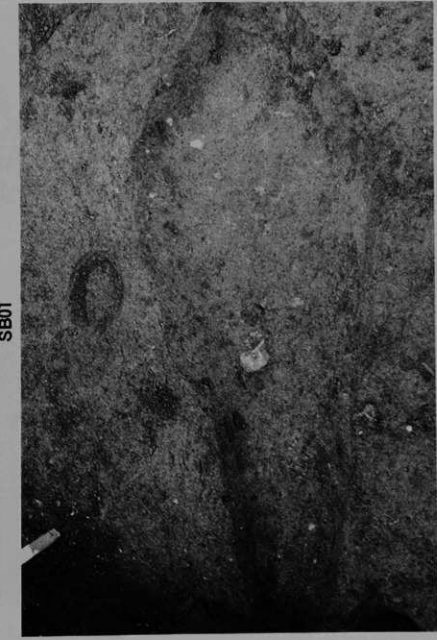
SK01



SK03

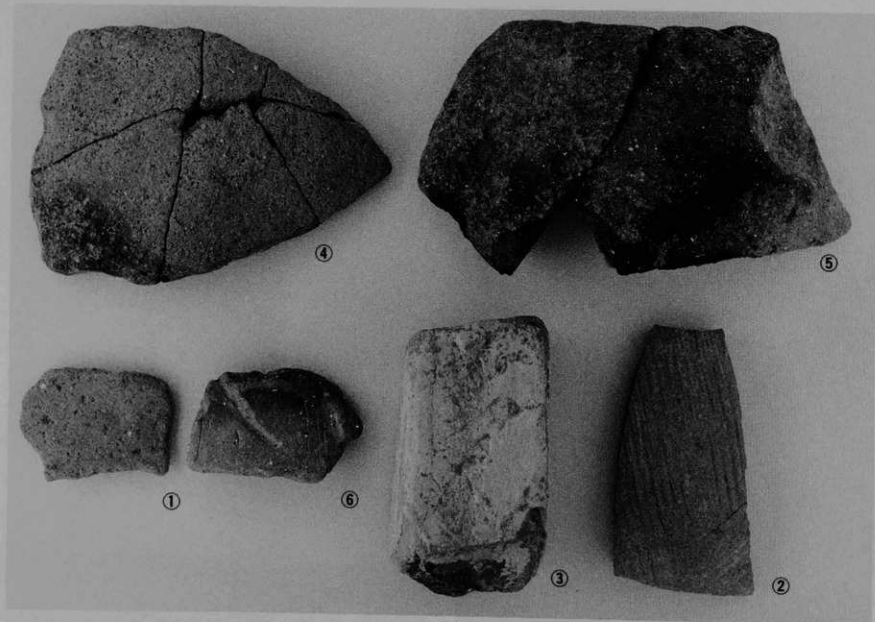


SB01



SK02

図版 4



出土遺物

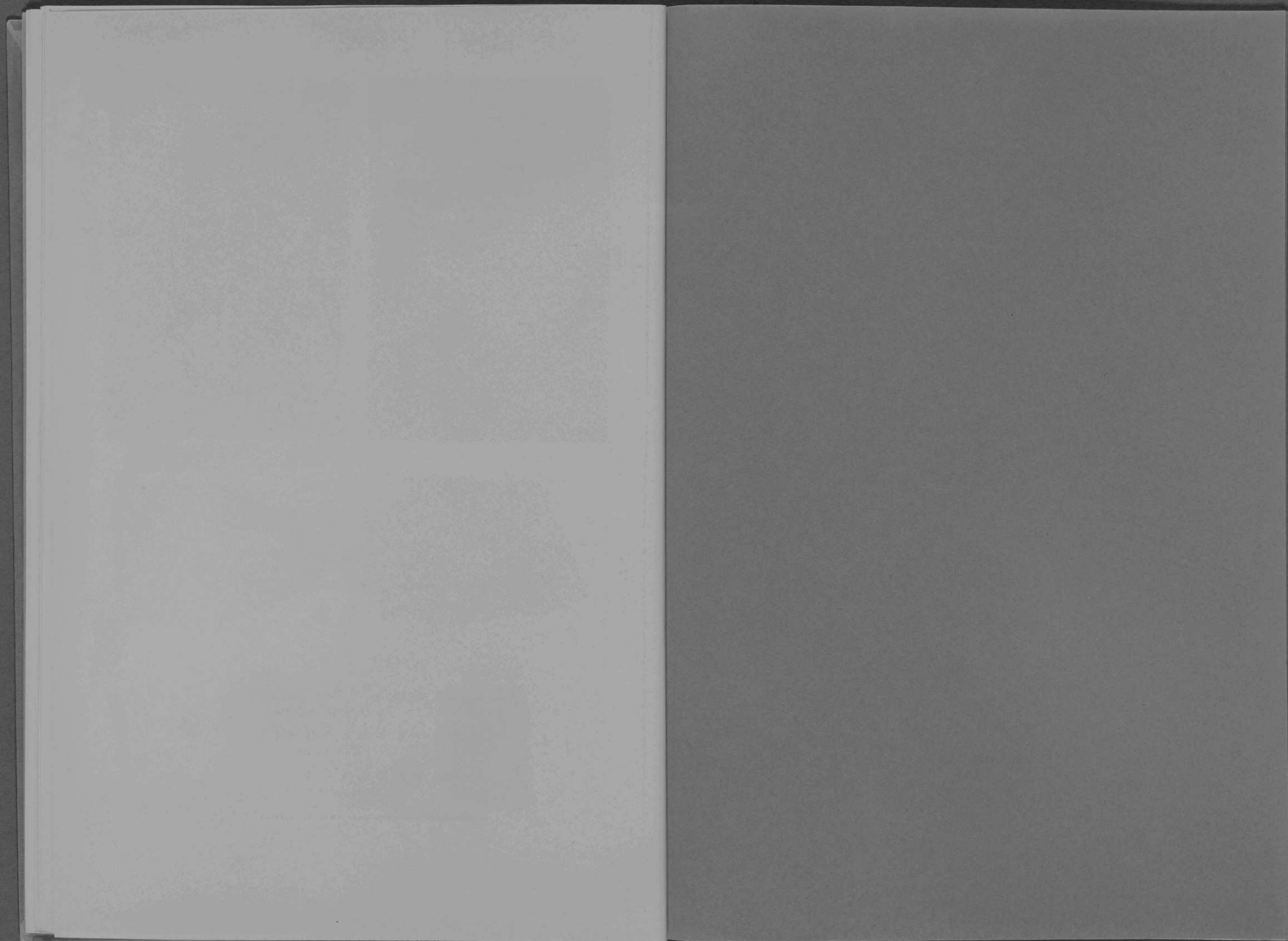
宮原遺跡

1994年3月

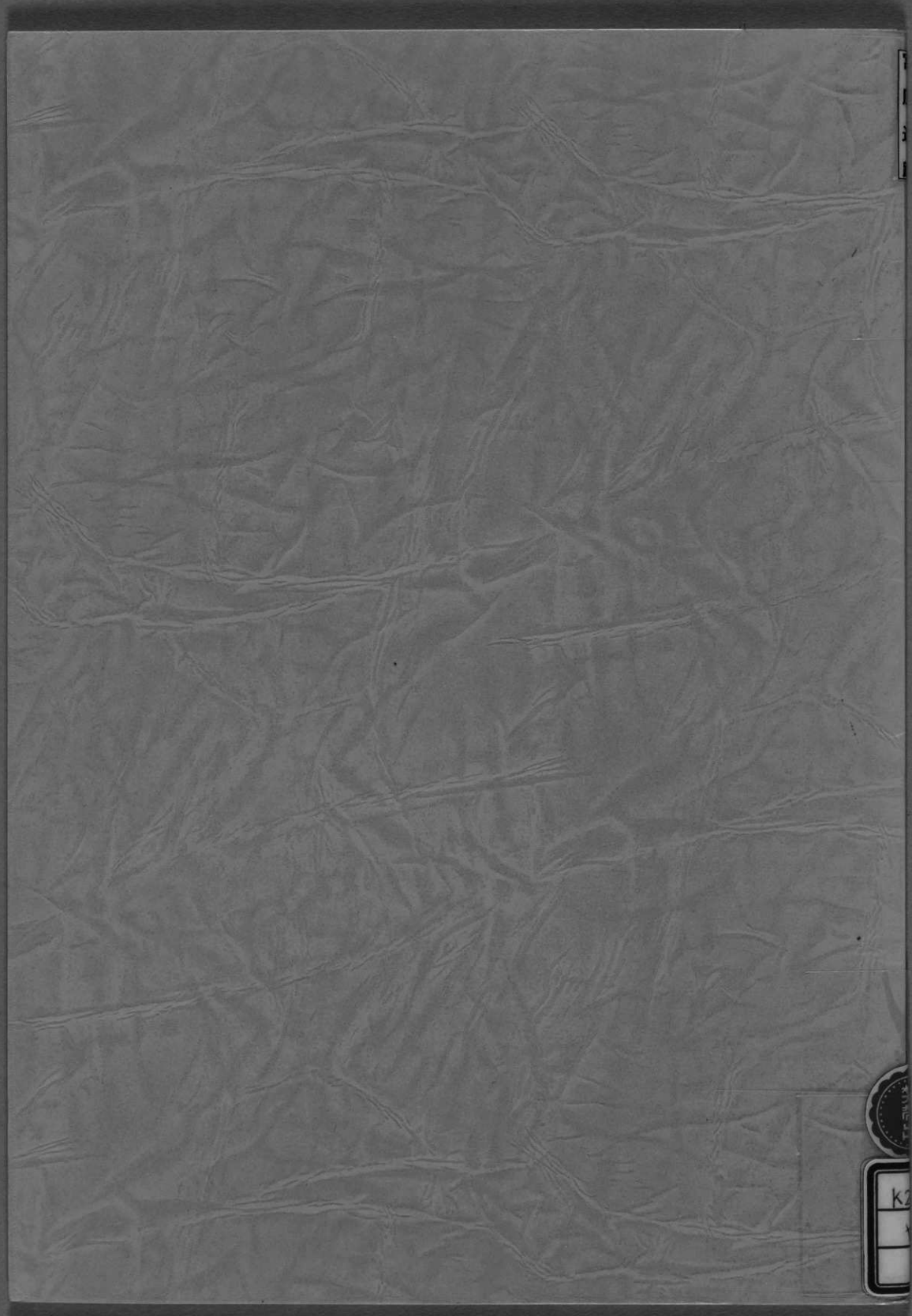
編集 山口県埋蔵文化財センター
山口市春日町3-22

発行 下松市教育委員会
下松市大手町3-3-3

印刷 泉菊印刷株式会社
下関市長府扇町8-48







3



K2
★